

Title	闘牛 (第一部)
Sub Title	La course de taureaux (Première partie)
Author	Leiris, Michel(Hayashi, Emiko) 林, 栄美子
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.34 (2002. 3) ,p.165- 189
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20020331-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

闘牛（第一部）

ミシェル・レリス 作
林 栄美子 訳

訳者前書き

本稿は、ミシェル・レリスの『闘牛』（Michel Leiris, *La Course de Taureaux*, Fourbis, 1991）の翻訳である。このテキストは、1951年に作られたドキュメンタリー長編映画『闘牛』（*La Course de Taureaux*）の、映像のバックに流す解説を、レリスが執筆したものであり、その原稿に基づいて、上記の書物が作られた。

ルネ・クレール、ルノワール、ブニュエルを世に出し、ヌーベル・ヴァーグとも関わりの深いプロデューサーとしてよくその名を知られるビエール・ブロンベルジェ Pierre Braunberger が、自ら監督をした4本の映画（長篇2本、短篇2本）の内の一つが、その『闘牛』という映画である（1951年バンテオン社製作）。

レリスのテキスト自体も、1951年2月から6月にかけて書かれている。文末には、1951年6月18日と、脱稿の日付が打たれている。手書き原稿は見つからないが、自筆の添削が入ったタイプ原稿32枚、日付のついた加筆部分3箇所（タイプ原稿合計6枚）、日付のない訂正変更部分2枚が、残されている。これらに基づいて、フランシス・マルマンド Francis Marmande の編集により、ここに訳出するテキストが編まれ、フルビ社から書物になって1991年に出版されることになったのである。レリスの死の翌年のことであった。

この書物には、マルマンドの前書きの他に、レリスによる二つの未発表の覚え書、「闘牛カレンダー」と「闘牛の思い出」、ブロンベルジェによる映画のシノプシス、さらに、『カイエ・デュ・シネマ』（1951年12月号）に載ったアンドレ・バザンの映画評も、一緒に掲載されている。レリスの覚え書の内容は、

前者が、1926年から65年までに見た37回の闘牛の日付・場所・出場した闘牛士の名と牛の出身牧場が列挙されたもの、後者が、とりわけ記憶に残っている11の場面を書き留めたものである。

監督したブロンベルジェ自身が書いたシノプシスでは、映画は第一部と第二部に分かれている。レリスのテキスト自体にはそういった表示はないが、翻訳は、シノプシスに従って第一部・第二部と二つに分け、紀要の今号と次号に分けて掲載することにした。第一部では、闘牛のおおまかな歴史と共に、闘牛の牛の育てられ方、正式の闘牛士になるまでの過程が、第二部では、実際の闘牛がどのように行なわれるのかが描かれていく。第一部は、ある闘牛士が出場前にホテルで準備をするシーンで終わり、第二部は、同じ闘牛士の闘牛場入りのシーンで始まる。同じ人物が前後半を繋ぐ役割を果たすように作られているのである。

レリスが闘牛を愛していたことは広く知られるところであり、またそれが、彼の代表作の一つ、『闘牛鑑』(*Miroir de la tauromachie*, 1938)を生みもした。しかし、『闘牛鑑』に籠っていた独特な熱気とエロチスムは、13年後のこのテキストには、一見感じられないように思えるかもしれない。スペイン市民戦争の最中と、第二次大戦後の混乱も収まった50年代に入ってからという、書かれた時代背景の違いはもちろんのこと、テキストのタイプがそもそも全く違うので、それも当然のことではある。映像に伴うテキストを書くなどということは、レリスにとっては、これが初めての体験であった。テキストの編者の解説によると、1951年6月にレリスからブロンベルジェに宛てられたとおぼしき手紙の下書きに、最初に引き受けた時には、こんなに大変な仕事になろうとは思ってもしなかった、という嘆き書き付けられているそうである。映像に付随するこうした解説文というものは、映像のモンタージュのリズムと合わせる必要があるばかりでなく、鑑賞される段階においては、文字としてでなく、朗読者(朗読はジャン・ドゥサイーJean Desaillyが担当)の声を通して音として受容されるという前提にたって、書かれねばならない。そのために、文の長さ、言葉の選び方などにも制約を受けることになろう。本来自分一人の世界のなかで行なわれる作家の仕事とは、かなり異なる面があるため、レリスが様々な困難に遭遇したであろうことは、想像に難くない。

一方、我々が手にしているのは、映像とも音とも切り離されて、ただの文字の列にもどった、書物上のテキストである。その意味では不完全なものである

のだが、一方で、別の独立した何かに生まれ変わってもいる。様々な制約によって削り取られた諸々の要素が、逆にテキストに力を与えている。今、その映画を知らず、文字としてのみ向かい合っているにもかかわらず、このテキストはイメージの喚起力を強く持ち、また、奇妙な言い方になるが、耳に聴こえてくるテキストになっている。その幻のイメージも声も、実際の映画とは違うものだが、テキストが目から読まれる時に起こるそれらの現象は、不思議に生々しいものである。訳者としては、日本語に移すことによってその力が出来るだけ損なわれることがないように、努めたつもりである。

日本ではあまり知られていないようだが、フランスでも、南西部においてだけは、スペインと全く同じ形式の闘牛が行なわれている。スペイン人闘牛士やスペインの牧場の牛も登場するので、南西部はスペインに繋がる闘牛文化地帯に入るのである。さらに、スペイン市民戦争とそれに続くフランコ政権の時代には、反フランコ陣営のスペイン人の多くがフランスに亡命し、フランス人でもフランコ主義を嫌う人々はスペインに入国することはなかったため、そうした人々のなかの闘牛好きは、みな南西フランスで行なわれる闘牛を見ていたのである。画家ピカソはその代表であり、ピカソの後期作品中の多くの闘牛のスケッチは、みなフランスの闘牛場で見たとのをもとにしている。闘牛場の最前列で、ピカソの横に座るレリスの写真なども残されている。レリスの「闘牛カレンダー」を見ると、彼自身も、市民戦争から大戦後の20年間ほどは、僅かにバルセロナで見た以外は、すべてフランスで闘牛に接している。

こうした背景があるために、一般のニュースで闘牛の話題が取り上げられたり、芸術の諸ジャンルで題材にされる機会もあって、闘牛を見たことがないフランス人でも、文化の一部としては接しており、僅かながらでも知識を持っているのである。

映画を作る前に、ブロンベルジェとレリスが考えたことは、その映画が誰に向かって作られるのか、という点であった。彼らは、あくまでも、いわゆる「アフィシオナード」、つまり闘牛を愛好する通^{つう}の人たちを対象とするのではなく、闘牛をよく知らない人たちを対象として想定している。しかし、すでにもう「アフィシオナード」であった二人にとっては、これは意外に簡単なことではなかったはずである。レリスの執筆の苦労には、この部分もかなり含まれているであろう。とりわけ彼らの間では頻繁に用いられるはずの闘牛用語を、出来るだけ多用せずに、また唐突に用いることのないようにするため、かなり神

経を使っていることが感じられる。レリスが、スペイン語をそのままイタリックにして用いている用語はそれに従ったが、フランス語の言い方に直している場合もいくつかあり、それに対応する日本語がないか、あるいは日本語にしても理解が不十分に感じられない場合は、訳文ではスペイン語の用語に直し、註で解説するようにした。フランス語には対応する単語が存在し、また解説なしにいきなり使われている用語もいくつかあることなどに、先程述べたフランスにおける背景と、日本との差が感じられる。

闘牛をよく知らない人を対象にしているとはいえ、この映画は闘牛愛好者の興味をも十分引きうるように作られている。シノプシスによれば、かつての偉大な闘牛士たちの実録の映像が、いくつも挟まれているからである。また、映画の冒頭でシンボルとしての牛のことから語りはじめるあたりには、闘牛愛好者としての特徴的な視点を見ることもできる。闘牛が牛を殺す見世物であるために、誤解されることが多いのだが、闘牛愛好者はいずれも、地中海沿岸の牡牛信仰に繋がる、「闘う牛」を愛でる者たちなのである。

牛の象徴性から始まって、村の闘牛の情景へと語り繋いでいく部分に、また全編に渡って常に、個々の具体的な事象を興味深く見つめ、そこに柔らかな感受性のメスを冷静に入れていこうとする語りには、レリスの文化人類学者としての面を感じることもできるだろう。また、レリスがどのようなタイプの「アフィオナード」であったのかという点も、彼の他の著作との関係を探る上でも論じる価値のあることであろうが、それについては稿を改めたい。いずれにしろ、レリスにとっては、『闘牛鑑』執筆の時とはまた違った、闘牛に別の角度から接する機会であったろうと思われる。闘牛を見た回数だけはレリスよりも多い訳者にとっても、そうであったことを付記しておく。 (了)

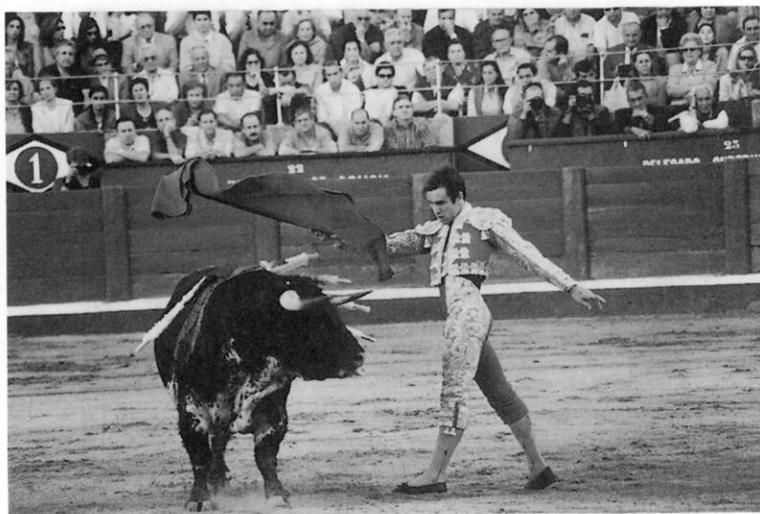


牡牛は、常に力の象徴であった。実に様々な民族が、宗教の中に牡牛をとり入れてきたのである。

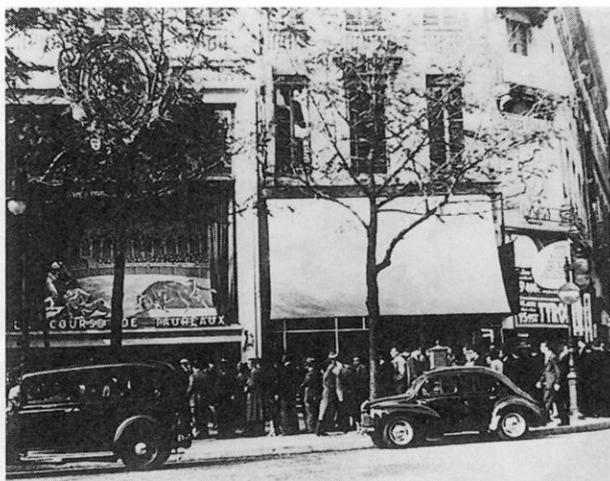
例えば古代ギリシアの神話は、いかにして白い牡牛とパンファエーとの間に生まれた怪物がテセウスに打ち負かされたかを、いかにしてアテネの英雄テセウスがマラトンの牡牛を手なづけ、犠牲に供したかを、いかにしてゼウ



図版1 闘牛場最前列のレリス
(左からピカソの息子パウロ、レリス、ピカソ夫妻)、1960年頃
Musée Picasso Catalogue des collections, 1985



図版2 現代の正式な闘牛。ムレータを用いた美しいパセ
(2001年9月サラマンカにて筆者撮影)



図版3 『闘牛』が上映される映画館の前に並ぶ人々（1951年）
 Pierre Braunberger, *Cinémamémoire*
 Editions du Centre Pompidou et
 Centre National de la Cinématographie, 1987



図版4 闘牛場でのブロンベルジュ
 （出所、同上）

スが自らの姿を牡牛に変えて、惚れ込んだエウロペを連れ去ったかを語っている¹。

スペインには、古い牡牛崇拜の痕跡が今も残っており、牡牛を殺すことは、今日でもなお一つの儀式、少なくとも競技と同じようなものなのである。

スペインの村では、守護聖人の祝日は、庶民の生活にとって重要な節目になっている。

そうした祭りの主要な呼び物は、カペーア、つまり牝の仔牛や非常に若い牡牛に闘牛の素人を立ち向かわせる出し物なのである。村の広場は、荷車で出口を塞がれて、俄仕立ての闘牛場に姿を変え、そこに獣が放たれるのである。

娘たちは踊り、若者たちは自分に備わった闘牛士の素質を見せようとする。

天気もとても良くて、今日のカペーアは期待できそうだ。村人たちや近隣の人々がこの広場へと押し寄せてきて、今日はここがこの地方の中心、生活のリズムを支配する太陽になる。

積み上げられた荷車の上には、もう見物人たちが陣取っている。

慣習に従って、カペーアに登場する獣たちは、道を通して連れてこられる。人々は、牡牛たちにすぐ近くまで追い詰められながら、その前を走って行く。これは、きちんとした行列などでは全くなくて、楽しい逃走である。危険に陥ったら、できる限り身を守っても恥ではない。

獣たちは、牛飼いたちと彼らを助ける馴牛たち（訓練された去勢牛）に導かれていく。

広場では、皆が牡牛の到着を待ち焦がれている。

馴牛たちは、温和な動物である。しかし、時には彼らも自分のやりたいように振舞うこともあるので、彼らを使って広場の中を空にさせるのは、必ずしも簡単な作業というわけではない。だが実を言うと、これもまたさらなる楽しみの一つなのである。馴牛たちはおそらく、むきになって自分たちにも

1. 編者の註によると、冒頭からここまでのテキストは、次のようなテキストと置き換えたものである（日付はなし）：「牡牛は常に力の象徴であった。実に多くの民族が、牡牛を宗教的儀式的なかにとりいれている。」

戦いの素質があることを見せたがっているのだろう。

広場の周りのバルコニーは、ボックス席や楽隊用の席になった。

彫像の真似をして、一人の男が牡牛の前に身をさらす。少し前に、この得意技を世に売り出した、ドン・タンクレードという名の男である²。牛に体当たりされずにいる秘訣は、動かずにじっとしていることであり、スペインの偉大な作家ベルガミン³は、この不動性をストア派のそれと比較した。

今度は牝の仔牛が放たれ、皆はそれを挑発して楽しむ。

ここでは、本物の闘牛用の牡牛と戦うわけではない。登場する牛たちは、年齢も体重も、闘牛規則を満たすには程遠い。とはいえ牛たちの精気は、素人闘牛士たちを困らせるには十分なものがある。いくつかのパセ⁴を成功させ、バンデリーリャ⁵を適切な場所に突き立てるには、すでに相当な達人でなければならない。ほとんど芸術的と言えるような数秒間の技にも、冷静さとかかなりの技術的知識が要求されるのである。

2. タンクレード・ロベスという男が、白い台の上に白尽くめの衣装で彫像のように立ち、そこに闘牛の牡牛を放ってもなお、身じろぎせず立ち続ける、という芸で一世を風靡したことがある。ものに動じないことの象徴のようにもてはやされ、「タンクレード主義」という言葉も生まれた。1900年12月30日にはマドリードの闘牛場にも登場したが、彼を真似る人々が続出して、死者まで出るようになり、1901年には彼自身が重傷を負ったことをきっかけに、この種の出し物は禁止された。

レリスがここで描いているのは、その後、仔牛を相手に似たようなことをして笑いを誘うという見世物になって残ったものか、村人がタンクレードの真似をするという祭の一場面であろうか。いずれにしろ、レリスはタンクレードに言及しなかったものと思われる。

3. ホセ・ベルガミン (1896-1983) は、闘牛を題材にした詩、随筆、評論を多く著している。
4. カーパやムレータといった牛を操るための布を用いて、自分は動くことなく、体のすぐ側を通過させて、牛の突進をやり過ぎず技を、パセという。闘牛の技の核心をなすものである。
5. 色とりどりの紙テープを巻いて飾られた銛。走ってくる牛に向かって弧を描いて走りながら、1対の銛を牛の背に突き立てねばならない。正式の闘牛では3対の銛を打つ。

たった一日の間にしろ英雄になって、たとえ一分間だろうと自分には闘牛士の素質があると示してみせることができるなら、牛に突き飛ばされ、踏みつけられるような危険を冒すだけの甲斐が、確かにあるのである。

パンブローナでは、7月の初めにサン・フェルミン祭⁶があり、幾つかの闘牛が催される。ここの闘牛は、最も興味深いもののなかに数えられている。

祭の人形たちが通りを練り歩く。東方の三博士やら、ナバーラの王と王妃を表しているものやらが見られる。

闘牛が催される祭の間は、毎朝、その日の午後に殺される運命にある牡牛たちの前を、若者たちが無我夢中で走る、という行事がある。こうして牡牛たちは、街なかを通過して、闘牛場内の牛を閉じ込めておく場所へと導かれる。パンブローナの闘牛の牡牛たちは、本物の闘牛用の牛であるが、サン・フェルミンの守護のおかげで、地方の慣習に従ってこんなふうに牡牛の前を走っても、もうあまり大事故が起こらないのだ（と言われている）。

牡牛の闘牛場への入場と収容のあと、角の先を丸くした牝牛が一頭放たれて、素人闘牛士たちの相手をさせられる。だが、角を丸くした牝牛だからといって、角の一撃を甘く見てはいけない。



いわば牡牛の力の一片を我がものとするために、牡牛に近づく。おそらくはそこに、重要な何かがある。今から40世紀前に、クレタ島の住民たちが自分たちの神々を称えて、男も女も参加する牡牛遊びを催した時に求めているものも、多分それであろう。

古代ローマ時代にも、牡牛を使った見世物が催されている。闘獣士と牡牛の戦いが、円形競技場の種目の中にあつた。

中世には、スペインではすでに、牡牛との戦いが大変好まれていた。しか

6. パンプブローナのサン・フェルミン祭は、ヘミングウェイの『日はまた昇る』に取り上げられたことで世界的に有名になった。特に、後段であれられるような、牛の前を男たちが走る「エンシエロ」は観光客にもよく知られているが、これを行なう土地は他にもたくさんある。

し、そのころはまだ、十分に確立された規則が存在しなかった。剣や槍で突いて獣を攻撃し、留めをさす時が来ると、牡牛の臑^{ひかがみ}を切るのである。盾を使ったり、樽を自分の前で転がしたりして身を守っていた。領主たちのスポーツであろうと、庶民の娯楽であろうと、この時代には、闘牛はまだ、閉じたフィールドで行なわれる一種の狩にすぎなかったのである。

ゴヤの「闘牛技」^{ラ・タウロマキア}⁷は、牡牛を相手にするもう少し組織化された騎馬槍試合を描いている。13世紀以降、貴族たちは少しずつ明確に整えられていった儀礼に従って、馬に乗り、槍を携えて牡牛と戦うようになった。状況によっては、彼らは地面に降りて、剣で戦いを続けなければならないこともあった。

数年前にリスボンで、ある外国の国家元首のために行なわれた闘牛は、その昔、誕生や洗礼や結婚といった、王族たちの人生の重要な出来事のおりに催された、豪華な行列から始まる闘牛を思い起こさせるものであった。

古くからの様式に従って、この種の仕事のために特別に調教した馬に乗った騎士が、牡牛と戦うのである。

17世紀——騎馬闘牛がその極みに達した時代——には、槍はレホンという一種の投槍に変わる。それを牛の首に突き立ててから、折り取るのである。

レホンは、有名なペルー人女性コンチータ・シントロン⁸のような、馬術に優れた闘牛士たちによって、今でもなお使われている。

コンチータ・シントロン（ファンたちは彼女を「金髪の女神」と呼んだ）と共に、最も愛されている騎馬闘牛士^{レホネアドール}⁹たちの一人は、有名な酒造業者で闘牛用の牡牛の飼育業者であるドメックの息子、アルバロ・ドメックである¹⁰。

こうした馬に乗る闘牛士たちの技の要点は、牛に向かって馬をギャロップ

7. スペインの画家フランシスコ・デ・ゴヤ（1746-1828）の代表作の一つ。闘牛の歴史や当時の闘牛の諸相を題材にした、40枚の銅版画のシリーズ。

8. コンチータ・シントロンは、1922年ペルーに生まれる。幼いころから馬術を学び、本国で騎馬闘牛士としてデビュー。1950年に引退し、ポルトガルに飼育牧場を作る。ヨーロッパにもファンが多く、引退興行をスペインやフランスでも行なった。

させ、牛が常に方向転換を強いられて全速力で走れなくなるように、弧を描いて馬を走らせることにある。それを利用して、騎士は最後に牡牛に武器を突き立てる。

だが、この種の戦いは——どんなにスペクタクルな面白さを持ち得るとしても——本当の闘牛と比べると、オードブルのようなものに過ぎないのである。



現代の闘牛へと通じる大きな革新が闘牛の世界に起こったのは、18世紀のことである。貴族たちが牡牛との戦いを行なわなくなると、徒歩闘牛士たちが前面に現れ、そうしたプロの闘牛士たちのせいで、あらゆる闘牛の技術は練り上げられ始める。

なかでも高名な闘牛士たちをあげてみよう。

フランシスコ・ロメーロ¹¹（棒に取り付けられた赤いフランネルの布、ムレータというこの重要な道具の発明者とされている）、

9. 馬に乗ったまま行なう闘牛は「レホネオ」といい、徒歩闘牛とは別なものである。「レホネオ」を行なう闘牛士を「レホネアドール」と呼ぶ。一方、正式の徒歩闘牛のことは「コリーダ・デ・トロス」といい、現在一般に闘牛とされているものはこれである。なお「トレロ」という呼び方は、「レホネオ」を行なう者のことも「コリーダ・デ・トロス」を行なう者のことも指し、一般に「闘牛士」という意味で用いられる。

10. 編者の註によると、このパラグラフは、1951年6月3日付けで次のようなテキストを書き換えたものである：「『金髪の女神』と呼ばれた彼女は、闘牛をやめたようなので、今や最も愛されているレホネアドールたちの一人は、有名な酒造業者で闘牛用の牡牛の飼育業者であるドメックの息子、アルバロ・ドメックである。」

アルバロ・ドメックは、1917年ヘレス・デ・ラ・フロンテーラの生まれ。彼の息子もまた、同名のレホネアドールである。

11. フランシスコ・ロメーロは、ロンダの生まれだが、生涯の詳細はよくわかっていない。ここで書かれているように、ムレータを発明するなど、近代闘牛を創始した人物と言われている。

コスティリャーレス¹²（今日の闘牛士たちがするような、剣での仕留めの仕方を最初にした人であつたらしい）、

ペドロ・ロメーロ¹³（ゴヤがこの人の肖像を残している）、

ペペ・イーリョ¹⁴（最初の偉大な闘牛論の著者であり、1801年にマドリードの闘牛場で牛に殺された）、

フランシスコ・モンテス¹⁵（テオフィル・ゴーチェとプロスペル・メリメが称賛をこめて語っている）。



1827年から1927年、つまりゴヤが亡くなってから一世紀が過ぎた時、没後100年記念の闘牛がサラゴサで催された。

スペインで最古のものの一つであるその闘牛場では、まず当時の衣装で着飾った人々が乗る、馬と二輪馬車のパレードがある。続いて、やはり昔風の服を着て現れる闘牛士たちが行進して来る。彼らの服装は、闘牛の偉大な革新者たちが身に付けていたものである。徒歩闘牛の発展はそうした革新者たちによるものであり、彼らと共に闘牛は殺戮に終わる危険な槍試合であるこ

12. ホアキン・ロドリゲス、またの名コスティリャーレス（1729-1800）は、セビーリャ生まれ。ロメーロ族を中心とするロンダ派に対するセビーリャ派を代表する闘牛士。牛の角の間に飛び込むようにして剣を刺す、「ボラピエ」という仕留めの方法を考案したと言われる。現代のほとんどのマタドールがこの方法を用いている。

13. ペドロ・ロメーロ（1754-1839）は、ロンダの生まれで、フランシスコ・ロメーロの孫にあたる。足をそろえて動かずに牛を呼び込んで剣を刺す「レンビール」という仕留め技を編み出すなど、闘牛技の父と言われる。後に、セビーリャに創設された闘牛学校の初代校長になる。

14. ペペ・イーリョ（1754-1801）は、ペドロ・ロメーロと人気を二分したセビーリャ派の花形闘牛士であり、1796年には『闘牛あるいは闘牛技』という本を著した（口述と思われる）。マドリードの闘牛場における彼の死の場面は、ゴヤの版画にも描かれている。

15. フランシスコ・モンテス、またの名パキエロ（1805-51）は、多くの作家や画家の作品の中にその姿を残している。

とをやめ、彼らのおかげでかつての無秩序な惨劇は調整され、洗練されながら、悲劇の水準にまで高められたのである。

19世紀の終わりごろの闘牛を復元するには、記念闘牛祭が必要というわけではない。映画——まさにそのころ発明された¹⁶——が、1895年マドリードでの、ピカドール¹⁷と闘牛士たちの闘牛場への到着の場面を撮影しているのである。馬や荷馬車に乗って、彼らはやって来る。

そこに、当時最も有名な闘牛士の一人、マサンティーニ¹⁸を見ることが出来る。最初は駅長をしていて、ついで演劇を試み、それから闘牛界へやって来て、その後代議士や県知事などを次々につとめたあと、最後は警察署長になったという人である。

闘牛場に押し寄せてくる人々は、映画の撮影機には注意を払っていないようである。映画は、オーギュスト・リュミエールによって、発明されたばかりのものだというのに。おそらくは、この最も驚くべき発明でさえも、まさにこれから闘牛を見ようとしている人にとっては大して重要ではない、ということなのだろう。

1912年には、映画は——この頃までにたいへん進歩したのだが——闘牛が催される日のマドリードの街路の様子を、生き生きと撮影している。スペインのどこかの町で闘牛場に行きたいと思っている観光客にとって、今でもなお役に立つ、良い忠告がある。わざわざ道をたずねるような滑稽なことをせ

16. 映画は、フランスのリヨンで写真乾板工場を経営する、オーギュストとルイのリュミエール兄弟によって、1895年に発明された。その年の暮れには、パリで、初の映写の興行も行なわれた。

17. ピカドールは、徒歩闘牛のなかで登場する、馬に乗って長い槍をあつかう役目の闘牛士。レリスはここで、ピカドールとトレロを分けて書いているが、一般にはピカドールも含めてトレロと呼ぶ。ただし、昔の貴族たちの、槍を使った騎馬闘牛の時代からの流れで、かつてはピカドールの地位は今よりも高かった。20世紀になって馬に防護布をつけさせるようになるまでは、メリメやゴーチュが作品のなかで伝えているように、巧みな馬さばきと槍の技を見せる花形でもあった。

18. ルイス・マサンティーニ（1856-1926）はイタリア人を父に持つ。ここに書かれているような、個性的な生涯でも知られた人であった。

ずに、人の流れに従っていけばよい——あるいは、一つの「それらしき」流れとっておこうか、というのは最近では、スペインの多くの町にはサッカーのファンもいるからである。

1912年以来、マドリードの闘牛の日の様子はあまり変わっていない。とは言え、新しい闘牛場¹⁹の周りに停車するのは、今ではもう馬車ではなくて自動車である。

ここはいったい、メッカかローマか、それともどこか他の聖なる都なのだろうか。

ここにやって来る群衆は、神々がほんの小さな奇跡さえも施してくれないならば、その神々に冒瀆の言葉をはこうとするのだろうか。

枝の主日（復活祭の前の日曜日）に、教会の門で柘植の枝が売られるのと同じように、扇が売られている。

有名な闘牛士たちのポートレイトは、この巡礼たちにとっての聖画像だ。

闘牛のファンたちは、いつも機嫌がよくて親しみやすいとは限らないが、しかし、信者——あるいは恋する人——というものが、必ずしももっと感じの良い人たちだというわけでもないだろう。

座席の値段はかなり高いので、検札係はよく監視していなければならない。ただ見をする者があとを絶たないからである。

闘牛への情熱にかられて、闘牛場の壁を攀じ登ってでも見ようとする人たちもいる。危険ということについてなら、それは闘牛士たちが冒す危険にも劣らないというのに。

日向の席は、日陰の席よりももちろん値段が安い。

闘牛愛好者たちに最も人気があるのは、第一列目の席である。闘牛の展開に自分も参加しているという感じが、そこではより完全なものになるからである。

19. 現在のマドリードの闘牛場ラス・ベントスは1931年に落成した。1912年の映画に映されているのは、それ以前の闘牛場ということになる。アルカラ門を出たところにあったこの元の闘牛場は、今ではもう残っておらず、ラス・ベントスはアルカラ通りをさらに西に行ったところにある。

獣が控え場^{トリル}²⁰から出てくると、あらゆる視線はそちらに向けられる。牡牛は危険な猛獣で、速くて力強く戦闘的といった闘牛の素質をすべて備え、頭を高く掲げている。20分後に——つまり、牡牛が、自分を手玉に取っているのは人間であり、襲いかかるべき相手は布ではなくて人間なのだと理解してしまう前に——、次のような作法に則って剣刺しをし得るような状態になっていることを、闘牛の規則は要求している。作法では、闘牛士は、牡牛の視界にはっきりと身を曝しながら、真正面から攻撃を仕掛け、一瞬角のどくところまで踏み込みつつ、両肩の間に剣を刺し込まなければならないのである。

この最後の対決のなかで人間が立ち向かう危険こそが、闘牛に崇高さを与えている。しかし、この時にまだ、獣の荒々しい力が完全なまま残っているとしたら、人間も危険を冒すことはできないだろう。従って、その荒々しい力を和らげ、制御することを、闘牛の各段階は目指しているのである。

牛が出てくるとすぐに、カーバ²¹で牛をあしらって、反応を観察し、その激しさを少し控えて、牛の攻撃が的確な目標に向かうように導く。

それからピカドールが登場するのだが、その仕事は（原則として）単に牛を鈍重にし、首の筋肉を疲れさせて頭の位置を調節することを目指している。

次に、飾りの付いた銛^{バンデリヤー}が打ち込まれる。それらは牛の速度を緩めるが、激しさを取り戻させる効果もあり、同時に角の攻撃をあまり使わせないようにもする。

最後に殺しの瞬間がやって来る。ムレータを用いた一連の技によってマタドールは²²、牛を手のうちに捕らえ、一種の緊密なダンスへと引き込んで、牛を決定的に支配したことを示した後、仕留めに適した場所へ連れて来なければならない。

20. トリルは、闘牛場内にある、出場直前の牛が入れられている暗い部屋。

21. カーバは、表が薔薇色で裏が黄色のマントの形をした大きな布。闘牛の第1段階で、マタドールとその助手たちが、牛を誘って反応や動きの癖を見るためや、牛を導きたい方向に動かすために用いる。さらにマタドールは、カーバを自在に美しく翻してパセを行なう。



このような決闘に、どんな牛でも使えるというわけではない。「勇敢さ」^{ブラブーラ}（あるいは闘争性）と「気高さ」^{ノブレス}（あるいは攻撃の率直さ）という必要な性質に恵まれた牛を、十分に数多く作るには、体系的な交配を行なう——それも非常に長い間行なう——必要があったのである。他方、牛は、もしカーバの技などをすでにかけてきたことがあって、人間の策略の裏をかくすべを学んでいない野獣とは違った状態になって、闘牛場に入ってくるのだとしたら、とても規則通りに戦いを進められるような相手ではない²³。そういうわけで、闘う牛たちは、人間たちといわば接触を持たずに生活できるような、広大な土地で育てられるのである。

鉄具のついた長い棒を持って、馬に乗って巡回する幾人かの牛飼いたち以外の人間は、ほとんど牛たちには近づかない。

闘牛（調教された去勢牛）たちが、これらの番人たちの仕事を助ける。

まさにその場所で、牛たちは牧草を食み、必要な食料の補充はバケツにいられて、そこに運ばれてくる。

主要な闘牛牧場は、アンダルシアやサラマンカやカスティーリャにある。かつては貴族たちの贅沢にすぎなかったが、今では企業化されている。

これらの飼育場では、牝牛も種牛も念入りに選別される。牛たちは牧場内の闘牛場で試験を受け、騎手の方に勇敢に突進するかどうか、槍で突かれる

22. ムレータは、この章の始めにも書かれているように、棒に赤い布をとりつけたもので、闘牛のクライマックス、殺しの場に用いられる。闘牛はマタドールを頭とする数人のチーム（鋸を打つバンデリリエーロ3人とピカドール2人が助手につく）で行なわれるが、牛を殺すことが許されるのはマタドールだけであり、ムレータを持つことが出来るのも、従って、マタドールのみである。

23. 編者の註によると、この部分は1951年6月9日付けの訂正箇所、次のような文章を書換えたものである：「他方、牛は、自分に仕掛けられる策略の裏をかくすべを、経験がないために知らないでいるような野生の獣とは違った状態で、闘牛場に入ってくるのだとしたら、とても規則通りに戦いを進められるような相手ではない。」

痛みにもめげずに襲撃を繰り返すかどうかを、観察される。

若い牡牛たちに対する試験は、囲いのない広い土地で行なわれ、牧場主の招待客たちが参加する遊びを伴っている。そうした遊びの一つは、仔牛を一頭だけ群れから離して追いかけて、臀部を棒で突いて転ばせる、というものである。

闘牛に出場するために必要な成熟度を持つのは、4歳から7歳の牡牛である。骨格がしっかりしていて、角が大きく、臀部がすらりとしまっていて、首の上部が逞しい獣たちである。

40年前には、闘う牛たちは、一般にとっても大きい体をして、堂々たる角を備えていた。今の牛は、その頃よりは小さくて、角もそれほど立派ではない。今日の観客の要求に応えるような静謐さをもって、牛の近くから技を行ない易いように作られているのである。闘牛士たちの圧力のもとに、最近数年間、飼育業者たちは、昔よりも扱いが困難でない牛を獲得すべく選別の方向を変えているが、それにもかかわらず、牛たちはまだまだ手ごわい。

長さが短くて、切っ先が内側を向いた角を持った牛は——このごろますます多く見られるようになったが——闘牛士に明らかかな有利をもたらすのである²⁴。

闘う牛（純血種の競走馬が普通の馬と違うように、他の牛とは違う）に対して、訓練された人間が対抗し、その中で最も優れた才能を持った者たちだけが、闘牛士として出世する望みを持ち得るのである。



スペインでは、闘牛のまねをして遊んでいる子供たちを、至る所で見かける。

天職に心を奪われた少年は、しばしば闘牛を学ぶ特別な学校に入る。そこ

24. 編者の註によると、このパラグラフは1951年6月9日に書き足されたものである。

には自転車や手押し車と交配させられたミノタウロスとでもいうような、奇妙な獣がいる²⁵。この敵に向かって、生徒はカーバのパセを行なうことを学ぶのである。なかなかうまくやりとげるようになるのだが、本物の牛を前にする時には、多分それほど純粋なスタイルでは出来ないだろう。

同じようにして、バンデリーリャを打つ訓練もする。熟練者が技の批評をしてくれるのである。さらには実際に、うまく間をとりながら、腕を高く揚げて、いかにして正しい位置に一对のバンデリーリャを打ち込むか、手本を示してくれる。

「死の道具」の使い方についての授業では、真剣のかわりに木製の剣を用いる。

それほど完全な設備が整っていなかった昔の学校では、牛に関しては、腕で支えて持つ角を用いた体験しかできなかった。牛が通過する時に不動のままにいることも、そこではまだ教えていなかった。それどころか全く逆である。というのは、古い時代の牛の前では、足をすばやく使うすべを知ることが、命にかかわる重要な事だったのである！

こうした稽古を重ねた後で、今度は本当の牛を前にしてやってみなければならぬ。少し運がよければ、実習生が、飼育牧場で牛のテストの日に、牝の仔牛を相手にした技を認められることもあり得る。牝の仔牛は牡牛ほどの力はないが、反応は早く、攻撃を受けたらやはり危険である！ こうして実習生は、自分が何をすることが出来るかを示せるのである。そこには、彼に助言してくれるプロの闘牛士たちも来ている。

これと同じようにして、花形闘牛士たちも訓練をしている。たとえばメキシコ人のアルーサ²⁶が、リサイタルではなくて即興で演奏するような寛いだ雰囲気の中で、技の練習をしているところを見るのは、闘牛の通たちにとっての楽しみである。また、別の人々にとっては、コンチータ・シントロ

25. 牛の頭から肩の後ろぐらいまでの大まかな実物大の模型が、手押し車のようなものに取り付けられた、練習用の機械のこと。誰かがこれを押しながら牛の動きを真似、それを相手に、パセのし方やバンデリーリャの打ち方、剣刺しなどを練習する。

ンが学校の中庭で遊ぶ寄宿生のような格好で練習しているのを見るのは、さらに好ましいことだろう。

時には、もっとマイナーな催しで、実習生が観客にその才能を示せることもある。「フェスティバル」と呼ばれるこうした集まりにおいて、彼らはプロの闘牛士と交代して、2歳の牛と闘うのである。

どんな犠牲を払ってでも世に出ようとする方法の一つは、闘牛の日に、古ぼけたカーパカムレータを手にして、闘牛場の円形の砂場に飛び入りをするのである。こういうことをしでかすみすぼらしい悪魔たちには、嘲弄をこめて「資本主義者」^{カピタリスツク}²⁷ という名が与えられる。いくつかの向こう見ずなパセをしたあとで、ふつう「資本主義者」は捕まえられてしまう。抵抗すると、力づくで連れて行かれる。その勇気のせいで、彼は監獄行きになるだろうが、だからといって、次の機会が訪れた時にまた同じことが行なわれるのを、防げるとは限らないようである。

とうとう、新人闘牛士が「光の衣装」を初めて身につける、記念すべき日がやって来る。それはたいてい、村で「経済的な若牛闘牛」^{ノビリャーダ}²⁸、つまりまだ

26. カルロス・アルーサ（1920-1966）は、メキシコ・シティーに生まれ、メキシコで闘牛士としてデビューし、1944年からスペインに渡って活躍した花形闘牛士である。

27. このような飛入りは、正規のルートを踏まえる環境にいないために、出場の機会が得られない、貧しい闘牛士志望の青年などがよく行なった。普通は「エスポンタネオ」と呼ばれるが、ここでレリスが紹介している「資本主義者」という言い方も、闘牛用語辞典などを見ると、かつては使われていたようである。今では、この「資本主義者」という言い方は「エスポンタネオ」のことではなく、マタドールが素晴らしい内容の闘牛をしたあとの荣誉として、闘牛場の大門から肩車をされて凱旋する時の、闘牛士を担いで歩く「担ぎ屋」のことを指すようになっている。

28. ノビリャーダ（若牛闘牛）とは、まだ正式な闘牛に出場する年齢と体重に達していない若牛（ノビーリョ）を相手にする闘牛のこと。3歳牛を使ってピカドール付きで行なう「ノビリャーダ・コン・ピカドール」と、2歳牛を使ってピカドールなしで行なう「ノビリャーダ・シン・ピカドール」がある。ここで出てくる「経済的なノビリャーダ」とは、ピカドールなしの方を指す。新人はこの形の闘牛からデビューする。

ピカドールが必要なほどは力強くない若い牡牛を使って行なわれる闘牛が、催される時である。そこには、闘牛の未経験者と下請けの助手しかいない。すぐにそれは、多少とも三面記事的な成り行きを呈してくる。喧嘩の仕返しとか、交差点での事故のような。バンデリーリャのところまではまだ、なんとかかなるのだが、さあ、仕留めの時には気をつけなくてはいけない！

あつという間に、見習闘牛士²⁹が注目の人になることもあり得る。アパリシオ³⁰とリトリ³¹が(1950年に)³²そうだったように。

ピカドールつきの若牛闘牛は、牡牛の年齢と体重以外は正式の闘牛とそっくりであり、闘牛愛好者たち皆の興味をひく。引退した闘牛士(年取ったジブシーのガーリョ³³や、ベルモンテ³⁴の息子のような)や現役の闘牛士も、

29. ノビリエーロは、若牛を相手にする闘牛士のこと。ノビリエーロはまだ正式のマタドール(註35参照)になる前の段階の、見習闘牛士である。

30. フリオ・アパリシオは、1932年マドリード生まれ。彼の父も、息子も同名の闘牛士。ごく若い頃から牛を相手に訓練する機会にめぐまれ、まだノビリエーロであった1950年に一躍有名になる。ライバルのリトリと競い合いながら、同年のシーズンの終わりに、同時にマタドール・デ・トロスに昇格する。1950年における二人の競い合いの素晴らしさは、闘牛史上に残るものと言われている。レリスがこの文章を書いた前の年のことであり、彼自身も実際にニームで見ているので、まだ強い印象が残っていたものと思われる。アパリシオは1962年に引退するまで活躍し続ける。

31. 本名ミゲル・バエス。《リトリ》は闘牛士としてのリング・ネーム。1930年バレンシアで、ウエルバに長く続く闘牛士の家系に生まれる。先代も先々代も、また彼の息子もミゲル・バエス・《リトリ》という同名の闘牛士。アパリシオ同様、若くして頭角をあらわす。50年代を代表する闘牛士の一人である。

32. 編者の註によると、この括弧内の部分は、「(2年前に)」となっていたものを1951年6月3日に訂正したもの。

33. 《エル・ガーリョ》と呼ばれた、ラファエル・ゴメス・オルテガのことと思われる。1882年生まれ。アンダルシアのジブシーの血をひく家系で、父の《ガーリョ》も闘牛士。弟の《ホセリート》と共に、偉大な闘牛士として知られた。弟は1920年に闘牛場で死ぬが、兄は1960年まで生きた。

34. 父、ファン・ベルモンテ・ガルシアは、1892年セビーリャ生まれで、闘牛技に変革をもたらし、一世を風靡した大闘牛士。1962年に自殺。息子のファン・ベルモンテ・カンボイは1918年マドリードに生まれ、やはり闘牛士になった。

彼らと同業の期待の新人たちを評価しにやって来る。

何が何でも頭角をあらわそうとしている20歳前の若者は、やがて高い金をとれる花形闘牛士になった時に、あるいは、大きな怪我を経験して分別を持つようになった頃には、自ら進んで冒そうとは思わなくなるような危険を、あえて冒すものである。闘牛においても、他の様々な芸術と同じように、最も真摯な、人の心を揺さぶるものは、往々にして若い頃の仕事なのである。

しかしながら、見習闘牛士はまだあまり経験を積んでいない。牛を支配するすべを知らないので、たやすく混乱に陥ってしまう。

新人も、すでに地位を得たマタドール³⁵も、常に躓きやすいものなのである。

多くの見習闘牛士が、すでにごまかしの技をいくつか知っている。角がいったん通過したあとで、牛の脇腹に身体をはりつけて、牛のすぐ近くで技をかけているように思わせるとか、布の襲のなかに牛をうまく捕らえておけない時に、尻をたたいて振り向かせる、といったことである。

マノレーテ³⁶を真似ただけの下手なパセは、アパリシオにとっても、誰にとっても、何ももたらさない³⁷。そして、突然事故が起こる。芝居がかった大げさな身振りで、マエストロ³⁸は助けに来る者たちを遠ざける。時には、新人が災難を避けられないこともある。困難に直面するなかで彼が見つける唯一の解決は、逃げることである。

35. 正式の闘牛は「コリーダ・デ・トロス」といい、そのなかで最後に牛を殺す役目を担う闘牛士が「マタドール・デ・トロス」であり、通常は単にマタドールと呼ばれる。闘牛士を志すとは、マタドール・デ・トロスをめざすことを意味している。

36. マヌエル・ロドリゲス・サンチェス・《マノレーテ》は、1917年コルドバに生まれる。スペイン市民戦争直後の暗い世相の中で、憂いに満ちた顔で黙々と牛を相手にする彼の闘牛が、観衆を熱狂させた。国民的偶像になる一方で、敵も多かった。1947年8月27日のリナレスの闘牛場での彼の死は、伝説となっている。レリスのこのテキストでは、第二部でマノレーテのことが詳しくとりあげられる。

37. 編者の註によると、このパラグラフは1951年6月9日に加筆された。



どんなに若牛闘牛が面白いものであり得ようとも、その名にふさわしい内実が展開されるのは、やはり正式の闘牛である。どちらも同じように、一般には3人のマタドールが交代しながら、同じ飼育牧場から来た6頭の牡牛と闘うのである³⁹。

闘牛が催される何日か前に、牛飼いたちは売られる牛を集める。馴牛たちの助けを借りて、それらの牛を群れから離し、仮の囲い込み場所に連れて行く。

牧場からあまり離れていない所で闘牛が行なわれる時には、道路を通して牛を連れて行く。

遠く離れた所で行なわれる時は、鉄道を使って輸送が行なわれる。

獣たちは、閉じ込められて間もないうちは、普通は神経が昂ぶっている。乗り物に乗せる前に、彼らが鎮まるのを待たねばならない。

牛たちが少し落ち着いてくると、頃合いを選んで、1頭ずつ囲いから出して、輸送に使われる檻のなかに入れるのである。

目的地に着くと、牛たちは——受刑者の独房に入ったまま車で運ばれて行くのだが——闘牛の催される日まで休んでいなければならない場所の近くまで、連れてこられる⁴⁰。

牛たちは、混乱を避けるために、1頭ごとに間をおきながら、順々に6頭すべてが檻から外に出される。

数回の闘牛が行なわれる、セビーリャの春祭りのためには、牛たちは、町

38. レリスはここで maestro という単語をそのまま用いている。闘牛の世界ではこの言葉は、マタドールのことを指す。芸術の名匠のような意味でも、また、パンデリリェーロとピカドールを雇って作るチームの頭・親方としての意味でも、この言葉が使われる。

39. 1回の闘牛は、原則として同じ牧場で育てられた牡牛6頭と、3人のマタドールによって行なわれる。マタドール・デ・トロスになった日付が早い者から順に行かない、1人目が1頭目と4頭目、2人目が2頭目と5頭目、3人目が3頭目と6頭目を相手にする。

の城門のところにある大きな囲い場に、一組ずつに分けて囲われる。飼育牧場が遠くないので、祭りの始まる数日前に、道路を通して連れてこられるのである。彼らはそこで、無邪気にユダの役割を演じる馴牛たちといっしょにいる。

皆が牛を見にやって来て、いざ戦いの時には牛たちがどう振舞うかを、各人各様に見抜こうとする。真の愛好者にとっては、休んでいる牛たちを見る楽しみは、闘牛を見物する楽しみにも匹敵し得るのである。

まさに闘牛の日の朝に、獣医たちは最終的に牛の診察をする。健康状態を確かめ、力を弱らせるために麻薬を飲まされたりしなかったか、角を削られたりしなかったかを確認する。あまりにもよく行なわれることだからである！ それからマタドールの腹心たちが、籤引きを行なう。牛たちは、出来る限り公平に、2頭ずつの組に振り分けられる。帽子の中に入れられた、折りたたんだ紙を引くという方法で、各々の組を3人のマタドールのうちの一人に割り当てていくのである。

今や牛たちは、^{トリスル}控え場へと移され、そこで1頭ずつに仕切られた区画に入る。番人たちは、小石を投げて、そのうちの1頭を門の方へ押しやる。門が開くと、牛はこの絶好の機会に飛びつく。しかし、罨はすぐに働いて門は再び閉まり、その牛を仲間から引き離してしまう。

自由の身になりたい、自分を悩ませに来るものを消してしまいたい、牛が考えるのはそういうことであり、従って、その攻撃自体も、単に防御の反応なのだろう⁴¹。

40. この節の冒頭からここまでの7つのパラグラフは、次のようなテキストを書換えたものである（日付なし）：「正式の闘牛にも若牛闘牛にも、牛は一般に6頭一組で売られる。輸送のために乗り物に乗せる日になると、牛飼いたちは、馴牛の助けを借りて、牛を集め、囲いの中に入れる。それから馴牛の群れを連れて帰る。闘牛が牧場の近隣で行なわれる時には、牛は道路を通して連れて行かれ、踏破する距離が大きすぎる時には、鉄道で運ばれる。後者の場合には、輸送に使われる檻に入れるために、牛が少し鎮まるのを待つ。目的地に着くと、それらの貴重な檻は、牛たちが休んでいなければならない場所の近くまで運ばれる。」

長い廊下が、牛を暗い小部屋へと導く。そこから外へ飛び出して、牡牛はふと気づくのだ。午後の終わりの光のなかで、自分がまさに戦いの場に立っていることを。陽光が射しかける色鮮やかな布。悪意に満ちた存在が、それを牡牛の近視の目の前にずっと差し出してくる。



闘牛が始まる時間の少し前、マタドールの一人マノロ・ゴンサレス⁴²は、ホテルの自分の部屋にいる。彼は、部下たちと一緒に、いつも彼ら皆を闘牛から闘牛へと運んでくれる大きな車イスパノに乗って、一日中走り、昨夜たどり着いたのである。とは言えマノロ・ゴンサレスは、今や元気潑刺でなければならない。ゆっくり遅くに起きたのだから。ついさっき、彼は軽い食事をした。万一怪我をした場合には、腹のなか为空になっているほうがよい。というのも、角の襲撃を腹に受けることが、しばしばあるからである。

マノロ・ゴンサレスは、長靴下を2足重ねてはく。マタドールの脚は、しっかりと鞆におさめねばならないのだ。

部屋にはなじみの人々が居合わせるのだが、そのなかにはマネージャーがいて、様子を監視している。不幸はあつという間に起こるので、花形闘牛士の身支度は隙のないものでなければならない⁴³。

腹をしっかり支えて、角に引っ掛けられることが出来るだけ少ないように、どこもかしこも非常にぴったりとしているので、闘牛服の半ズボンを穿くのは難しい。

マノロ・ゴンサレスは、煙草を断ってはいない。彼がこれからやろうとしていることに必要なのは、とりわけ度胸と、敏捷な足と、鋭い目と、柔軟な

41. 編者の註によると、このパラグラフは1951年6月3日に加筆された。

42. マノロ・ゴンサレスは、1929年セビーリャ生まれ。純粋なセビーリャ・スタイルの闘牛士として評価され、高い人気を得ていた。

43. 闘牛服の着付けは、その闘牛士の剣持（モソ・デ・エスパダ）をつとめる人間が準備し、彼の手伝いを受けて行なわれる。剣持は、そのほかにも闘牛士の身辺の世話をする役目を持つ。

手首。それに、かなりの知性と多くの技術が伴っていけばよいのである。

髪の毛にひっかけて留める、コレータという人工の髪房をつけることができるのは、なにも運動選手のような人間というわけではない。コレータは、牡牛を殺すことを職業としている人間にとっての、祭司の徽章のようなものである。

マノロ・ゴンサレスは、ほとんどの闘牛士^{トレロ}たちのように、ピエタの画像の前で瞑想する。彼はそれをどこにでも持って行く。ムレータや剣と同じくらい、彼には必要なものである。

前回の闘牛は成功だった。しかし、2頭目の牛では——非常に丈が高くて、横に角を突いてくる牛だったが——あやうく災難にあうところだった。今回は、牛たちはそれほど大きくはないし、そのうちの1頭では、良いところを見せられそうである。しかし、簡単そうな牡牛でさえも、実際は決してそれほど簡単ではない。いかなる闘牛士^{トレロ}も、「成功」とか「不成功」とかいう言葉を、果たしてその日の終わりに生きた自分の耳で聞けるかどうか、分からないのである。

（第一部 終）